

なぞの音は何を意味するのか？

樹木が音をたてる

これといった原因がないのに音がするのは、誰にとっても不可思議である。こうした現象に対して、いつの時代も人間は何らかの意味づけをしなければおさまらなかった。例えば、樹木が鳴ることについて見てみよう。ここで樹木が鳴るといのは、風に木がそよいで音をたてるのではなく、わけもなく樹木が鳴る、理解しがたい現象をいう。中国古代の人は、これをどう考えたのか。

星が落ちたり樹木が鳴ったりすると、国中の人々は「これは何かの前兆か」と言って恐れているが、何でもないことである。天地陰陽の変化として、まれに起こることだからである。それを怪しむのはいいが、畏れるのはいけない。(星墜木鳴、国人皆恐、曰是何也、曰無何也。是天地之變、陰陽之化、物之罕至者也。怪之可也、而畏之非也)

『荀子』天論

たしなめるような書き方からして、国中の人々が星が落ちたり、樹木が鳴ったりする現象に恐れ慄き、そこに社会の何か大きな動きを読み取ろうとしていたことが窺える。戦国時代後期の思想家である荀子(BC313?~BC238?)は、それを怪しんでもいいけれど、恐れることはないという。性悪説を唱える荀子は、樹木が鳴るよりも恐ろしいものとして人間の引き起こすわざわざ「人祲」があると論を進める。

頻繁に起こることで、人間が引き起こす人祲こそ、恐るべきものである。なおざりに耕して穀草を傷め、粗略な除草で収穫を失い、悪政で民心を失い、田が荒れて穀草の育ちが悪く、買い付け米の値段は高くて民衆は餓死し、道端に死人がころがっている。これを人祲という。(物之已至者人祲則可畏也。楛耕傷稼、耘耨失歲、政險失民、田穰稼惡、糶貴民飢、道路有死人。夫是之謂人祲) 同上

自然に対する人間の主体的能動性に着目する荀子は、稀に起こる自然の不可思議な現象は怪しむだけで恐れることはないが、人間の行いに由来して頻繁に起こるわざわざいこそ恐るべきだという。それはもっともな主張である。しかしそれでも古代の中国人は、こうした聴覚現象に対して、それを何とか意味づけようとした。

石がものを言う

実は荀子より以前から、不可思議な音についてはその原因が考えられてきた。前回も登場した晉の平公(BC557~BC532在位)もやはりそれが気になっただけで、楽人の師曠にその現象の意味を尋ねている。

昭公の八年(BC534)のこと、晉の魏榆で石がものを言った。晉の平公は師曠に「石がなぜものを言ったのか」と尋ねた。師曠は「石はものを言うことができませんから、何かがつりついたのでしょ。そうでなければ民の聞き違いでしょう。ただわたくしは時宜を得ない工事を行い、民に怨嗟がきざすと、ものをいうはずのない物がしゃべることがあると聞いたことがあります。宮殿は豪奢ですが、民力は凋落し、怨嗟の聲が巻き起こり、明日の命の保証もない現在、石がものを言うのも無理もないことかもしれません」

と答えた。このとき晉の平公は鹿祁宮を造営中であった。(伝八年春、石言于晉魏榆。晉侯問於師曠曰、石何故言。對曰石不能言、或馮焉。不然民聽濫也。抑臣又聞之曰、作事不時、怨譟動于民、則有非言之物而言。今宮室崇侈、民力彫盡、怨譟並作、莫保其性、石言不亦宜乎。於是晉侯方築鹿祁之宮) 『春秋左氏伝』昭公八年

さきほどの『荀子』のように話を音と違う方向にもっていくのではなく、ここでは石がものを言う意味を、なにかが憑依したものでなければ、民の怨嗟がなせるわざであると、音からはそらさずに、暗愚な平公を諷めている。優れた楽人である師曠は、その音に対する平公の恐れを利用して時の政治のありかたを見つめさせようとした。為政者が横暴を極めて民が困窮するのは世の常であり、たまたま起こった石がものを言うような現象をとりあげて、為政者の横暴を止めようとする動きもまた、以後数えきれない。それら不可思議な音の現象は「鼓妖」と呼ばれた。なぞの音をめぐって、為政者とその横暴を止めようとする者たちの攻防は絶えず繰り広げられたのである。

王朝の異変を知らせるなぞの音

『漢書』から始まって各王朝の史書には「五行志」がたてられ、そこになぞの音は「鼓妖」としてとりあげられていった。たとえば「仏殿の閉じられた門がおのずと開いたり、銅像が戸外にひとりで出たり、鐘鼓が何もしないのに鳴ったりするのは、鼓妖のようである」(『隋書』「五行志」)、というようにである。それにつづく文には、やはり鼓妖と為政者の関わりが明示されている。「揚雄は人君が聡明でなければ、凡俗に惑わされ、実力が無いものも臣下として榮達する。すると鼓妖が現れるのだとした」とある。『隋書』は、前漢の思想家である揚雄(BC53~AD18)の言を引いて、その説明とした。不可思議な音の発生は、中国古代において政治が杜撰であることを知らせるものとされた。確かに為政者にとっては、ありがたい話ではないが、なぞの音に対するひとつの解釈とはなったのだろう。

だが、それが昂じて、石が鳴ると皇帝が殺されたり、王朝が滅びたりするという記載もある。その例として、日本の国学者谷川士清(1709~76)が作った『倭訓栞』の「將軍塚の鳴動」に書かれている、唐の玄宗皇帝の作った華岳廟の石碑が自ら鳴ったという事象がある。確かに中国の文献にも、宋代の張洎撰『賈氏談錄』に、「広明中(880~881)、その石忽ち自ら鳴る。明年巢寇闕を犯し、その廟も亦た賊火の熱く所と為る」と記されている。谷川士清は、將軍塚の鳴動を日本の保元元年(1156)の大乱の兆しや、慶長三年(1598)の豊臣秀吉の死の前兆として捉えて、唐代が滅亡した黄巢の乱の前兆としての石碑の鳴動を引用している。このように、石がたてるなぞの音は、国の大きな変化と結びつけられ、それは日本にも影響した。そのなぞの音が何かの前兆だったということは、もちろん後になってわかることであり、その記録は後世の人の手によることは確かである。ただ不穏な時代にあってその異様な空気を感ず、それを大変なことが起こる前触れと恐れた人々の心情は、いまの私たちにも十分共感できるものがある。